

説教 「わがための十字架」 イザヤ 53:1-5、ローマ 3:21-31 2023. 4. 2

仙川教会代務者、ユーカリが丘教会牧師 大串 眞

本日は、受難節・レントの中の受難週となりました。教会の暦では、棕櫚の主日と言って、主イエスがエルサレムの城壁の中に入られた際に、人々が棕櫚の葉を振って迎え入れたことを記念しています。それから一週間受難と死を辿るのです。次週主日イースターの前日の土曜日までを受難週といいます。

今から 20 年以上前になりますが、わたしは聖地旅行の団長となって、イスラエルを旅行したことがあります。団長と言っても、役割は毎朝の礼拝担当をさせていただくことです。詳しくはガイドがついていたので、解説を聞きながらの旅行でした。エルサレムの中でヴィア・ドロローサ悲しみの道というゴルゴタの丘を目指す道があります。20 くらいのステーションがあって、ここで主イエスが倒れた時に水を差した女性がいたとか、ステーションのプレートにエピソードが刻まれていて、巡礼者は、立ち止まって祈りと黙想の時を持ちながら、受難の道を辿っていきます。

わたしたちは、そのように、主イエスの受難と贖いの死を思い巡らしながら、今日の聖書に触れて参りましょう。

そのような受難週でありますのに、福音書の受難の場面や、十字架の場面ではなくて、これらを預言しているイザヤ書の苦難の僕の箇所と、ローマ書 3:21-31 を合わせて読んでいただきました。ローマ書の解き明かしを、月に一度、仙川教会の礼拝の中で私はしています。今まで、1 章のところを二回にわたっていたしました。そして、今日は 2 章を飛ばして、3 章の 21 節以下です。このローマの信徒への手紙は、福音・グッドニュースを明らかにして、わたしたちの救いとしようということです。そして、すでにクリスチャンの方は、救いの原点に立ち返ろうということです。その福音は、何かというと、1 章 16-17 節にありました。福音は信じる者すべての者に救いをもたらす神の力だといい、福音には「神の義」が啓示されていますが、それは、信仰によって実現するのです。信仰によって生きることになるのです。こういう主題が最初に示されてローマ書が始まったのでしたね。そして、この救いは、前回いたしました、人間の罪が明らかにされることがセットになっていました。罪に対して神が怒っている。それはなかなか深刻な中身だったのですが、そういう暗いことや重いことが明らかになってこそ、救いというのは鮮明になっていくということをご一緒に立ち止まって考え思いめぐらしたのです。さて、今までの中で、福音をあらわす救いは「神の義」という言葉で語られていますが、これは、その時には触れませんでした。それは、今回のところで、お話しますと予告をさせていただいておりました。それはですね、今日のところを読んでいただくとお気づきになったかもしれませんが、「神の義」という救いのことが中心的に語られているからです。そして、それゆえに、ここは、ある意味ローマ書の中心と言われています。そして、それは、今日の受難週の主題とピタッと一致します。主イエスの十字架に至る苦難と十字架の死は、どういう意味がわたしたちにあるのだろうかということです。そのことのドロローサの道の終点で、ステーションに書かれている言葉として、ローマ 3:21-31 があると行って良いです。しかし、この言葉はわかりやすい言葉ではないかもしれません。読んでいても、なにか入り組んでいるようで、なかなか自分の心に入って来ないかもしれません。それでわたしは、この説教で、聖地旅行に同行するガイドのように、ポイントだけお話させていただきたいと思います。

それでも最低限の言葉の説明をさせていただかないと、お伝えできませんので、それはおつ

き合ってください。

「神の義」という言葉が繰り返し出てきます。それは先ほど申しました、救いとか、救いの道筋とか、またそのための神の働きという意味を含んでいます。「義」という言葉は正しいという意味ですが、これはただの正しさということでもありません。神様が正しさを貫こうとすると、それは、前回触れたように、神の怒りとなって現れるわけです。あるいは放置されるという仕方で現れる。それは直接怒りをぶつけることよりも、もっと深刻な中身があります。しかし、このままいくと、その人間の罪に対して、どうしても、審判とか、永遠の罰という仕方で報いがあるということになります。しかし、神様はそのように正しさを貫かれるということか。確かにそういう面もあるのですが、そうとばかりではなくて、それは、神様は正しい神様であるというだけでなく、愛に満ちた神様だと聖書は語っています。実は、この神様の愛ということも、正しさを求めるということと結びついています。ですから、この神の義ということも、また義ということも、「神の恵みの働き」と旧約聖書の詩編で、新共同訳で訳しています。また、この新共同訳に落ち着くまでにいろいろと翻訳を模索していた時期がありますが、試訳として出ていたのは、「神の救いの働き」とか「神との正しい関係」と訳していたのです。つまりどういうことかという、動きがあるのですね。頭で考えて冷たい言葉で収まらない、神様のいてもたってもいられない情熱とか、働き。それが「神の義」という救いなのですね。

そして、どういう仕方で現れたかという、十字架という出来事の中に現れているというわけです。で、いろいろな聖書の言葉の説明を省いて、わかりやすく言いますと、十字架というのは、2つの面があるというのです。ひとつは、十字架というのは、罪のさばきだというのですね。神様は今まで、人間の罪を見逃してきたというのです。それは、前回触れましたね。人間の罪を放置されて、罪の心に渡されて、まかされておられた。そうすると落ちるところまで落ちてしまうのですが、それが最後の神様の御心でなかったのです。神様は十字架で、み子を代わりに裁かれました。それは、人間の罪を罪として明らかにして、罰するということだったのですね。十字架のイエスの姿の中には、このように神様が正しさを貫いて罰するという面があるというのです。しかし、同時に、神の正しさは、ただ、罰するというのではないのです。なんとかして救いたい、愛する者を決して見捨てないという愛の真実があるのです。イエス・キリストが身代わりに罰せられたゆえに、イエス・キリストを信じる者は、それだけで、罪赦されることになったのです。それがここで、恵みとか、言葉としては出てきませんが、内容からわかることは神の愛の表明ですね。そういうことが、人間を救う神の御心として現れています。そして、さらに言いますと、

「キリスト・イエスの贖いの業を通して」とありますが、十字架による罪の贖いということについても詳しく語られています。これは旧約聖書の伝統にならって、犠牲の小羊の血によって、贖いが成立するということがあります。この贖いという救いには、罪を罰するということと、救いということの両面があるということなのです。この贖いということの説明はほかの言い方もありますが、それは省略しています。大切なのは、この二面性です。神様の側からすれば、正しさと愛。わたしたちの側からすれば、罰せられることゆるされることが二重に言われているのです。これが、十字架の罪の贖いという救いです。

みなさん、このことは何を意味しているかという、神様の愛は、ただゆるすだけのあまつたるい愛ではないということです。わたしたちの罪が原因で、ひとり子の十字架の犠牲があったのですから、それは、聖なる愛といえます。神様は聖なる愛の神です。

そして、わたしたちは神様のみ前になんの善行を積み重ねてなくても、ただ信じて救われる。信じたらこの恵みをいただけるのですが、これは決して安っぽい恵みではないということです。神の子が犠牲になる。そういう尊い犠牲が払われている。つまり、値い高い恵みなのです。

「神の義」という救いの道筋は、イエス・キリストにおいて現れて終わりではなくて、それを信じて、救われ、新しく生きていくものが、応答して生きる。感謝して、よろこんで人生を生きるだけでなく、行いも伴なって生きていく。そういう新しい人生になっていくという道のりをも、今日の箇所は網羅しています。それは、今後のローマ書の解き明かしの説教で明かにして参りましょう。

さて、最初のお話した聖地旅行、巡礼の旅において、実際に、ヴィア・ドロローサを歩む時に、わたしたちの団体は、そのスタート地点で礼拝をしてから歩き始めました。その時の礼拝は私でなくて、一緒に同行して下さった80代を越えていた最長老の牧師が語って下さいました。もうお亡くなりになりましたが、奥山寛司牧師といいます。その先生は、2つのことを話して下さいました。第一のことは、自分の罪がイエスを十字架につけたことを思い巡らしつつ歩こうということでした。そのコースの最後に、聖墳墓教会が建っています。そこがゴルゴダの丘とされています。その教会の中にある聖画のことだったと思います。その聖画は十字架の場面なんです。その十字架を取り巻く群衆の一人として作者が自分の姿を描き込んでいるということです。自分は無関係なのか。素通りしていくのか。そうではなく、まさしくわたしがイエスを十字架にかけたのだ。わたしの罪が。そのことを知ろうという。

第二に。だからこそ、自分のための十字架であるとしろう。

わたしの罪がイエスを十字架につけた。こんなわたしのために十字架にかかってく下さった。わたしをゆるすために。わたしを生かすために。それを知ろうという。

先日、ユウカリが丘教会の祈祷会でのことです。祈祷会で十字架の場面と一緒に読みました。「わがための十字架」という題で、思いめぐらしました。お祈りを合わせる前に、感想を自由に話し合います。その中で、わたしの罪ということ。ゆるしというテーマで話し合いました。自分の罪を知ること。それは日常のことで、ある意味よくわかっています。しかし、聖書によってより鮮明になることを確認しあいました。そして、それ以上に大切なことは、こんな自分のことをよくご承知で、主が十字架に架かってく下さったこと。こんな自分が根本的に赦されていること。こんな自分が神様に受けいられている。いつもリセットされて、先週のこと。ある意味忘れて新しい一週を生きてよいこと。自分はダメなところはいっぱいあるが、欠けた器を神様は用いてくださる。わたしの人生を期待してく下さっている。こんな感想を言い合いながら、悔い改めとゆるしへの感謝の祈りをささげました。

みなさん、わたしたちの巡礼の旅は、ここから始まるのです。洗礼を今日受けられた姉妹も、そして、わたしたちも、ここから新しい旅が始まる。今日のこと、これからのことも、含めて、「神の義」という神様の恵みの働きは続くのです。神の義の中を歩むことを感謝して生きていきましょう。祈ります。